



没後50年

Marilyn Monroe

マリリン・モンロー

未公開ヌード

1962年8月5日、36歳で亡くなった世紀のセックス・シンボル、マリリン・モンロー。没後50年を迎え、未公開ヌード写真を一挙紹介。撮影したのは、ローレンス・シラー。回想録「マリリン・アンド・ミー」の発売と同時に発表された作品を、本邦初公開。詳しくは、56頁からの特別読物で。

週刊新潮

間の風はヒタリと止んだ。

また、次のようなコメントも口にしてている。

「ボッティチェリのピーナスに異議を申し立てる人なんていないでしょ。それなのに、私の裸にはどうして文句を言うのかしら」

なかなか洒落た物言いだ。

映画女優が裸身をさらし、そのことを恥じるどころか誇るべきこととして位置づけてみせる。この「事件」は、道徳的価値観から抑圧され、覆い隠されていたものが、じつは単純に「美しい」のだという意識を人々に抱かせる契機となった。今年マリリン・モンロー没後50年。肉感的な美しさは、今なお他の追随を許さない20世紀最大のセックシンボル。

ここでは、彼女の「ヌードあるいはセミヌード」に焦点を絞りつつ、波乱に満ちたその人生を振り返っていきいたいと思う。

1926年6月1日、マリリン・モンローことノーマ・ジーン・モーターセン

20世紀最大の「セックスシンボル」マリリン・モンローが36年の人生を閉じてから、今夏で50年。その肢体には、当時の米国の価値観をも変えてしまうほどの力があつた。彼女の知られざる「ヌード史」を、作家の井上篤夫氏が明かす。

は貧しい境遇に生まれた。

母親は精神を病み、父親は誰だかもよくわからない。

マリリンは生後間もなく里子に出されたが、里親は次々と代わった。幼い少女が性的な虐待を受けていた逸話はあまりに有名だ。孤児院暮らしもした少女は、いつも粗末な、色褪せたブルーのセーターを着ていた。

名場面が招いた不幸

高校を中退し、16歳で近

所の青年ジム・ドアティと結婚するも、夫に内緒で陸軍のカメラマン、デヴィッド・コノーヴァアのモデルになったり、プロカメラマンのアンドレ・ドウ・デインズにセクシーなポーズを撮らせたりした。19歳で

思春期を迎えた少女は、

男たちの注目を浴びたいという願望を抱くようになる。

それは夢にも現れた。「私は教会で、オルガンに合せて讚美歌をうたっていたわ。椅子に座ったとたん、服を脱ぎたい衝動にかられたの。裸の私を神様とみんなに見て欲しくって」(後年のインタビューで)

ブルー・ブック・モデル・エイジェンシーの専属モデル

ルになってからは、三流雑誌の表紙などで屈託のない笑顔をふりまいた。のちに彼女は語っている。「少しも恥ずかしいとか罪深いかと思わなかった。みんなが私を見てくれると思

うと、寂しくないから」

20歳で映画会社のスクリーンテストに合格し、晴れて女優の道を歩むことになった。ジムとは離婚。その頃のハリウッドでごく当然の慣習みたいなものだった「プロデューサーの愛人」となり、以後しばらくコールガール同然の生活を送ったマリリン。当時撮られたと思しき、酷く猥褻な印象の写真も残っている。

マリリンは生涯で30作の映画に出演した。その中でヌード、セミヌードを披露したのは4作(後述するが、うち1作は未完)。意外に少ない、と言えようか。

だが、マリリンは、長らく抑圧されてきたエロスをスクリーン上で解放したという意味において、作品数は少なくとも、映画史上で大きな役割を果たした。早い話、検閲に抵抗し、米国の偽善的な空気に冷や水を浴びせたのである。

初めてセミヌードを見せた作品は『ナイアガラ』(53)

ベッドでタバコを啜る場面、

シャワーを浴びる場面、肌の白さもまぶしい下着姿でストッキングを穿く場面などは、まさにセンセーショナルであった。

この作品で、マリリンは愛人と組んで夫殺しを企てる悪女役に挑んだ。胸元の開いた真紅のドレスにハイヒールで、ヒップをくねらせて116歩を刻む有名な「モンロー・ウォーク」に大衆の目は釘づけとなり、世界中にモンロー旋風を巻き起こした。

あまりにも露骨にセックスを連想させる動作には、日本の劇場で上映中、客席から笑い声も漏れたというが、このときからマリリンは「世界のセックスシンボル」と呼ばれるようになり、過度のセクシーイメージの強さから「オツムの弱いブロード女優」との風評も付まると言うようになる。

54年、人気の面で絶頂期を迎えたマリリンは、元ヤンキースの大選手ジョー・ダイヤモンドと結婚する。日

週刊新潮

1952年、目にも艶やかなヌード写真が米国のメディアの話題をさらった。赤いビロードに胸も露わに横たわり、腕を頭上に伸ばし、しなやかな体を弓なりに反らすなどして様々な媚態を見せているのは、誰

あろう女優マリリン・モンローその人であった。これらの写真がどれほどの衝撃を世に与えたか。50年、マリリンは『アスファルト・ジャングル』で悪徳弁護士「姪」を演じたが、本来これは弁護士の

「情婦」であったところ、倫理規定で設定の変更を余儀なくされたのである。かほくにモラルに厳しい時代、同年には続けて『イヴの総て』にも出演して注目を浴び始めた「映画女優」が、仮にも裸をさらすなどとい

うことは、スキヤンダルに耐えられないはずなかった。写真は遡ること3年前の49年、マリリンが23歳のときに撮られたものだ。『風の園』(48)でチョイ役を演じた彼女の仕事にも恵まれなかつた彼女はほとんど一文なし。

車のローンや家賃の支払いにも窮していた。そんなある日、石油会社のカレンダー用にヌードモデルを物色していたハリウッドの写真家トム・ケリーに接触。50ドルぼつちのギャラで、自ら被写体になることを買って出たのである。

のちに「黄金の夢」と題

される1枚(上の写真)を含む撮影カット24点はしかし、印刷には回されず、目の目を見ることもなかった。やがてそれらの存在を嗅ぎつけた20世紀フォックス社が、女優マリリンを一層売り出すため意図的に流布させた、というのが今ではほぼ定説となっている。マリリンが自分でメディアにばらまいたという説もある。

いずれにせよ、問題は当の本人の釈明である。

「ええ、モデルになったわ。だって私は飢えていたの」インタビュウでは、そんないささか能天気なセリフを吐いたが、有望な新人女優が悪びれずに自身の過去を認めたことで、冷たい世

【特別読物】

没後50年!

栄光と醜聞の狭間に綴られた

作家 井上篤夫

マリリン・モンロー
ヌードの裏履歴書

「マリリン・モンロー」

スーパースターの裏面

フが憶えられない。役作りのため10キロ減量し、おかげで頬はこけ、身体からは以前の張りが失われていた。その日、5月23日のマリリンは上機嫌だった。夫が覗き見しているのを知りながら、真夜中のプールで挑発的に泳ぐシーン。肌色のボディスーツを着ての撮影だ。彼女が爪先をちよつと水に入れようとしたとき、ジョージ・キューカー監督は演技が気に食わず、「カット！」と叫んだ。

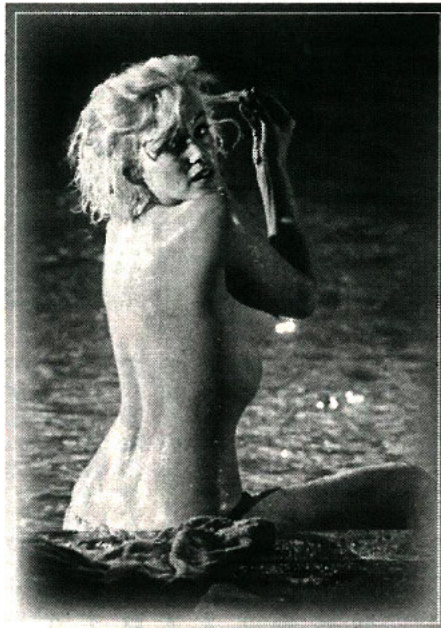
マリリンは、誰にも気づかれないようカメラに向かつてペロリと舌を出して、「フアック・ユー」

直後、今度は撮影助手が、ボディスーツの下にブラジヤーのラインが透けて見えると訴えた。もううんざりといった素振りを見せてマリリンが提案した。

「30分だけカメラマンと2人にしてくだらない？」

すると突然、すべてを脱ぎ捨ててプールに入った。スタジオは騒然となる。特別に撮影を許可されて

いた、当時25歳、新進気鋭のスクールカメラマン、ローレンス・シラーは、水飛沫をあげてプールを泳ぐ女優の姿を懸命に追った。上唇を舌先で舐める官能的な表情や蠱惑的な笑顔。プールサイドに足を掛ける扇情的なポーズ。背中から



偶発的に始まった撮影

挑発するかのようでした」シラーは近著『マリリン・アンド・ミー』でそう記している。

このとき、マリリンは再出発の決意をしていた。ハリウッドと決別し、尊敬するイタリアの舞台女優エレオノーラ・ドゥーゼをめざす覚悟だったに違いない。マリリン、36歳。

ロバート・ケネディなんて過去の人よ、私には未来があるの。マリリンはシラーにヌード写真公開の条件を出す。

「私の写真でエリザベス・テイラーを世界中の雑誌から追放してちょうだい」

当時、テイラーは超大作『クレオパトラ』で膨大な予算を使い、20世紀フォックスの屋台骨を揺るがせていた。おかげでマリリンはフォックスから撮影を急げと尻を叩かれた。彼女はテイラーを嫌悪していた。

だが、撮影はまったく進まなかった。6月8日、マリリンは「ケネディ大統領の誕生日祝賀パーティに無断で出席した」ことや「撮影の遅延」などを理由にスタジオ側から解雇される。

映画は未完に終わった。6月16日、シラーの撮った1枚が『ライフ』誌の表紙を飾った。プールサイドでブルーのバスローブを着たマリリンの写真だ。

6月23日。カメラマンのパート・スターンは『ヴォーグ』誌のため、12時間にわたってヌードを撮影。薄く透けた布を通してマリリンの乳房が見え、腹部の胆のう炎の手術跡までもが捉えられている。吹っ切れたような表情を見せるこの作品は、彼女の「最後の写真」と呼ばれている。

マリリンが寝室で死亡しているのが発見されたのは、8月5日未明のことだ。

ベッド脇のテーブルにはブロードウェイミュージカルの出演交渉のためにニューヨークから届いた電報が置かれていた。多数の薬のビン、空になった睡眠薬のビンもあった。検視の結果、「推定自殺」とされたが、その死には現在も多くの謎が残されたままだ。ケネディ兄弟との恋と破局が背景にあったとも言われている。

ベッドに横向きに寝て、首までシーツをかけ片手に受話器を握ったままの亡骸は、全裸であった。

その肢体で人々を魅了してきた大女優も、人生の末期は誰に看取られることもなく、暗闇の中でひっそり息を引き取った。しかし、フィルムに焼きつけられた「匂い立つような生と性の美しさ」は、歳月を経てなお輝きを失うことがない。

フィルムの中で、女優は永遠の存在であり続ける。

週刊新潮

本での新婚旅行から戻って撮影された『七年目の浮気』(55)は、ヌードシーンこそないが、世界的な話題を呼んだ。そして、そのことによつて私生活で大きな代償を払ったのである。

話題となったのは、そう、地下鉄の通気孔から吹く風で、マリリンのスカートがまくれ上がるシーンだ。下着までが見えそうになる場面は、今日でこそさほどエロティックに感じないが、当時は「淫らだ」という批判の声も沸き起こった。

それよりも不幸であったのは、多くの観衆と撮影現場にいた夫デイマジオが、新妻が「醜態をさらした」と憤激したことだった。翌日、メーキアップ担当者が、夫の暴力を受けたマリリンの顔の青あざを隠すのに苦労したほどだ。そんなこんなでマリリンはデイマジオとも離婚した。

ウッドで作られたイメージに疑問を感じた彼女は、ニューヨークのアクターズ・スタジオで本格的な演技の研鑽を積む。この作品はハリウッド復帰第1作である。スターを夢見る酒場の女性歌手が、無鉄砲なカウボーイのプロポーズに思わず

突然すべてを脱ぎ捨てて

マリリンは新しい恋でも話題を集めた。お相手は劇作家アーサー・ミラー。ヌード3作目は夫となったミラーの脚本による『荒馬と女』(61)。離婚した傷心の女ロズリンを演じるマリリン。ベッドに横たわる彼女にクラーク・ゲーブルがキスをする。このシーンも7回にわたり撮り直された。体を包んでいたシーツが外れ、一瞬だが、片方の乳房がカメラの前で覗いた。だが、映画は興行的に失敗に終わった。よくないことは重なるもので、不義の恋の相手だったゲーブルが急死。自身も流産し、ミラ

涙ぐむ。朝のベッドでわずかに肌を見せてのシーンだったが、新鮮な色気を感じさせた。共演者のドン・マレーはその色香に圧倒され、私生活、私の取材に、「キスシーンを何度も撮り直したよ」と、笑って語ったものだ。

と離婚。やがて精神に変調をきたし、対人恐怖症に悩むようになる。自殺未遂騒動を起こして睡眠薬やアルコールに溺れ、なにより女優として決定的にまずいことに、ムービーカメラの前に立つのが怖くなった。そのマリリンを救ったのは結局のところ「カメラのレンズ」であった。カメラと言ってもスチールカメラ。スチール撮影なら、カメラマンひとり向き合えばいい。映画撮影より自由に自分を演じることが出来る。61年11月、『ルック』誌は創刊25周年号で特別企画「ハリウッドの大スター」を

組んだ。カナダ出身の新進カメラマン、ダグラス・カークランドは白いシルクのシーツでマリリンの体を覆うアイデアを思いついた。マリリンは『ルック』誌のオファーを快諾した。「カレンダーに載ったことはあつたけど、私は『タイム』誌には載らない。時間(タイム)に遅れるので有名だからよ」

撮影当日、フランク・シナトラのレコードと冷えたシャンパンが用意された。カークランドはかつて、私の取材にこう述べた。「想像より痩せていました。肌は艶があり、眩(まばゆ)さにくらくらするほどでした」ベッドの上に拵(こしら)えた足場が上がってカメラを構えるカークランドに、マリリンはシルクのシーツを軽く持ち上げ「ねえ、来て」と誘った。彼は体を乗り出し、ベッドの縁に膝をつき、無我夢中でシャッターを切った。マリリンが抱きしめる白いシーツは、白い肌をおのこと際立たせた。

60年と61年には、写真家集団マグナムの女性カメラマン、イヴ・アーノルドがヌードを撮っている。

このとき、気鋭のカメラマンの観察眼は、30代半ばになったマリリンの肉体的な衰えを見抜いていた。イヴは、湖のほとりなどで遊ぶ姿を撮影したが、「マリリンはすでに若い女の体のラインを失っていたわ。なのに、それを認めようとしなかった。『若者向けの雑誌でも通用するわ』なんて言い張っていたの」

ここで映画でのヌードに話を戻そう。4作目は『サムシングス・ガット・トゥ・ギヴ』(『女房は生きていた』)。62年4月23日から始まった撮影はトラブル続きだった。マリリンは病気を理由に遅刻したり休んだり。浮名を流していたロバート・ケネディ(司法長官)の子を宿した、などという噂も囁かれていた。精神科医の診察を受けてはいたが、睡眠薬の常用のために精神的に不安定で、肝心のセリ

